

琉球大学学術リポジトリ

沖縄におけるライフコースのコーホート間比較調査 中間報告：調査報告書

メタデータ	言語: 出版者: 琉球大学法文学部社会学学科 公開日: 2009-03-04 キーワード (Ja): ライフコース, ライフサイクル, 生涯発達, コーホート分析, 役割移行, 社会史, 沖縄 キーワード (En): 作成者: 安藤, 由美, Ando, Yumi メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/20.500.12000/9048

5 職業経歴

ここでは、職業経歴についてとりあげる。職業経歴は、教育経歴と同じように個人のライフコースにおいて重要な部分をなすと考えられる。ただし、教育経歴と異なり、全員が職業経歴をもつとは限らず、そこには一定の男女差があるだろう。また、生涯を通じて形成されていく職業経歴は、他の経歴と比べて、その時代の社会的・経済的状況に左右されるものと考えられる。そこで、対象者における職業経歴がどのように展開していくのかを明らかにしていきたい。そのために、本章では、職業経歴がなんらかの発達的な過程をたどるものと仮定しておく。その過程をとらえるには、まず、経歴の開始の状況を見ておく必要がある。そこで、初就職の時機ときっかけをとりあげる。そして、始まりをとりあげるならば、経歴の終了、すなわち職業からの引退についてもみることになる。残るは、中盤の発達過程をどうとらえるかであるが、本章では、大きく2つの側面からこれを見ていく。1つは、職業経歴の安定の達成であり、いま1つは、管理的な役割（被雇用職業における管理職、自営業における業主への就任）への移行である。以下では、これら3つの局面—開始・中盤・終了—をかたちづくる出来事の実験のしかたを見ていくことになるが、それにさきだち、まず年齢・年次ごとの就業率をとりあげるることによって、職業経歴の概観を得ておこう。

なお、職業の内容にかんしては表5-1に示すようなカテゴリーに分類し、本章では分類2を用いた。また、この調査において用いる職業とは、収入をとまなう仕事に限定しているが、農業にかんしては対象者の本人の判断に基づいている。

表5-1 職種のカテゴリー

分類1	分類2	分類3
ホワイトカラー	ホワイトカラー1	専門・技術的職業・管理的職業・職業軍人
	ホワイトカラー2	事務的職業・販売的職業
ブルーカラー	ブルーカラー	運輸・通信・保安的職業・技能的職業・サービス業
自営業	自営業1	専門・技術的職業
	自営業2	商業・工業・サービス業
	農業	農業

5.1 職業経歴の概観

本節では、職業経歴の概観を、コーホートの就業率の年齢・年次別の変化、就職回数からみていくが、その前に職業経験をみておこう。

5.1.1 職業経験率

表5-2にあるように、男性には、すべての人に職業の経験があり、このことについてはとくに説明を要しないだろう。一方、女性においても、C-Iは92.9%、C-IIは94.9%という高い経験率を示していることから、男性同様、女性が職業をもつことは標準的であるといえる。

表5-2 職業経験の有無

		あり	なし	N (100%)
男	C-I	100.0	-	49
	C-II	100.0	-	66
女	C-I	92.9	7.1	56
	C-II	94.9	5.1	59

5.1.2 年齢別・年次別就業率

つぎに、年齢別の就業率の変化をみていこう（図5-1）。ここには性別による職業経歴の展開の違いが顕著に表れている。男性のばあい、逆U字型を示すこ

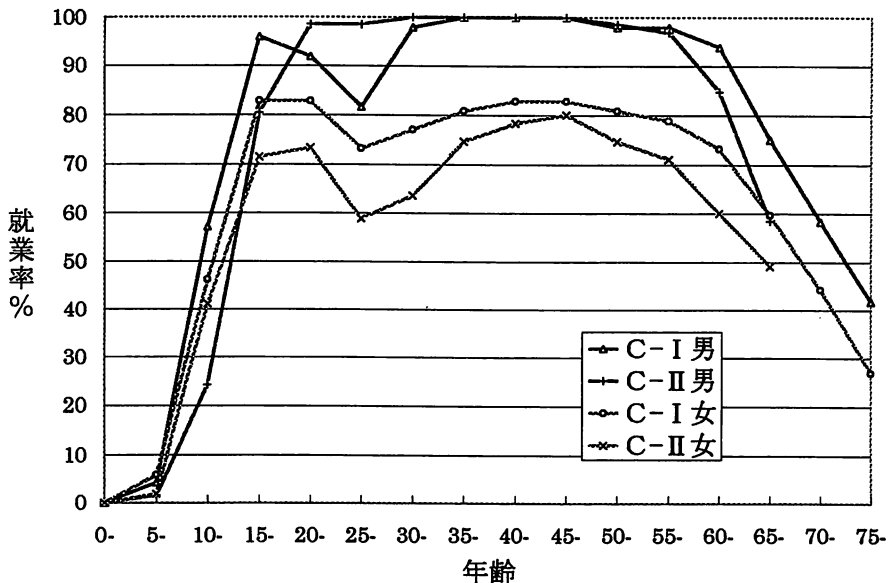


図5-1 年齢別就業率

とが予想されたが、C-Iにおいて20歳代後半に就業率の低下がみられた。このような特徴は、第二次世界大戦との関連が考えられるが、これについては、あとで就業率の年次別変化をみることにしたい。一方、女性のほうは、女性に特有のM字型曲線をなしているが、その形状はゆるやかで、とりわけC-Iの就業率はライフコース全般を通じてかなり高いといえる。

つぎに、年次別の就業率の変化をみよう。これによって、さきにC-Iの男性

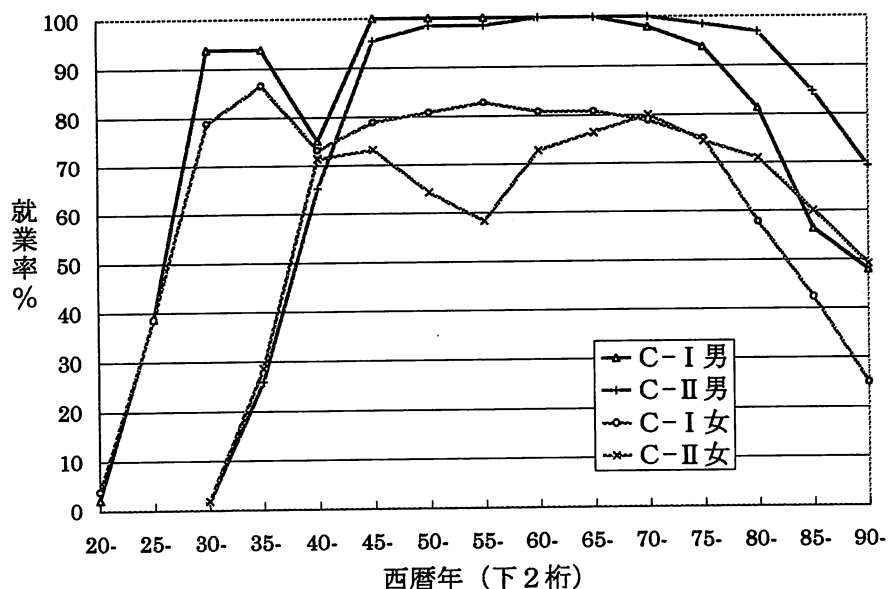


図5-2 年次別就業率

にみられた就業率低下の歴史的背景について、手がかりが得られるかもしれない。図5-2に示されているように、C-I男性における20歳代後半の落ち込みは、1940年代前半（昭和15～19）年の間に対応している。このことから、戦争期に仕事から離れる割合が高かったのである。また、コーホート別、男女別の4つのグループを比較すると、終戦の年を境にして、それらの相違のあり方が異なっている。すなわち、終戦前では、就業率曲線は男女差よりもコーホート差が顕著であるが、戦後になるとコーホート差よりも、男女差のほうが顕著になっていることが特徴的である。

5.1.3 就職回数

就職回数（これまでにいくつの仕事についたか）は、平均値でみると、男性では、C-Iが4.3回、C-IIが3.8回、女性では、C-Iが2.9回、C-IIが3.2回であった（表省略）。男女別では、男性のほうが女性よりも多くの仕事を経験している。男女それぞれにおけるコーホート間の差は、さほど大きくはないが、男性ではC-Iの方がC-IIよりも多い。これは、現在までの生きてきた時間の長さに違いがあるので、ある程度当然であろう。しかし、女性には、そのような傾向はみられなかった。

5.2 職業経歴の開始

本節では、職業経歴開始の様子を、初めてついた職業（初職）について、開始の時機、内容、ついたきっかけなどからみていこう。

5.2.1 初職の時機

まず職業経歴を開始する年齢からみてみよう。表5-3にあるように、ほとんどの者が中央値において、

14～15歳で職について

おり、男女間、コーホ

ート間にはほとんど差

がみられなかった。し

かし、四分位範囲

（QR）を見ると、男性

はC-Iは2.4、C-IIが3.2であるのに対し、女性はC-I、IIともに4.0と幅が広がった。女性の方が、男性よりも四分位範囲が大きいのは、中央値と第3四分位数の間隔が大きいことによる。

表5-3 初就職年齢

	N	Q1	Med.	Q3	QR
男 C-I	49	12.6	14.1	15.0	2.4
男 C-II	66	14.5	15.2	17.7	3.2
女 C-I	52	13.1	14.7	17.1	4.0
女 C-II	56	13.3	14.9	17.3	4.0

5.2.2 初職の内容

次に初職の内容をみてみよう（表5-4）。全体的にみると、農業とブルーカラーで7割を占め、ホワイトカラーが少ない。コーホート別にみると、C-Iは、男女とも最も多いのは農業で、男性が58.3%、女性が45.8%を占めた。次にブルーカラーが続き、男性は22.2%、女性は27.0%だった。ホワイトカラーは、男性は11.2%、女性は2.1%にすぎなかった。一方、C-IIでは、男女ともブルー

カラーが農業を上回っており、男性では 37.5%、女性では 50.0%を占めた。農業は、男性が 28.1%、女性が 20.0%にとどまった。また、このコーホートは、ホワイトカラー（ホワイト1およびホワイト2）の割合がC-Iに比べて多く、男性は 28.2%、女性は 17.5%であった。このホワイトカラーの内訳では、男性は管理的・専門的職業に従事するホワイトカラー1が増えたのに対し、女性は事務的・販売的職業に従事するホワイトカラー2が増えた。

表5-4 初職内容

		ホワイ ト1	ホワイ ト2	ブルー	自営2	農業	その他	不明	N (100%)
男	C-I	5.6	5.6	22.2	5.6	58.3	-	2.8	36
	C-II	18.8	9.4	37.5	-	28.1	3.1	3.1	32
女	C-I	-	2.1	27.1	8.3	45.8	8.3	8.3	48
	C-II	2.5	15.0	50.0	5.0	20.0	7.5	-	40

5.2.3 初職のきっかけ

初職についたきっかけをみてみよう（表5-5）。どちらのコーホートも、また男女ともに、「家族・親族を通して」初職に就いた者が一番多い。ただし、C-I男性では、「家業の継承」もこれと同率である。しかし、コーホート間で違っているのは、C-Iに比べてC-IIでは、「知人・友人」または「学校・斡旋機関」といった、家族・親族（家業の継承も含めた）以外の経路で初職についた人が多く、とくに女性にその傾向がみられる。2つのコーホートの比較だけで多くのことはいえないが、おそらくこうした傾向は、仕事の内容が、被雇用職がC-IよりもC-IIに多いことと関連していよう。

表5-5 初職についたきっかけ

		家族・ 親族を 通して	知人・ 友人を 通して	学校・ 斡旋機 関	家業の 継承	その他	不明	N (100%)
男	C-I	32.7	10.2	2.0	32.7	20.4	2.0	49
	C-II	31.8	10.6	7.6	25.8	22.7	1.5	66
女	C-I	34.6	11.5	9.6	25.0	17.3	1.9	52
	C-II	32.1	19.6	19.6	8.9	16.1	3.6	56

5.3 職業経歴の安定

本節では、職業経歴中盤の安定度についてみてみたい。具体的には、1つの仕事に落ち着くといった、職業経歴の安定はどれくらいの人が経験するのか、その経験時機はいつか、また、その仕事の内容はなにか、といったことである。ここで、安定職と最長職という2つの操作的概念を用いる。最長職とは、対象者が現在（調査時点）まででもっとも長くついた仕事のことである。一方、安定職とは、初めて10年以上継続してついた仕事である。両者の違いは、最長職は、個人の主な仕事を知るためによく用いられるが、これには期間の限定がないため、たとえ1年であっても、それが一番が長ければ最長職ということになる。一方、安定職は、10年という期間の限定があるため、職業経歴上になんらかの仕事の移動がない期間があるかどうかを知ることができる。女性のばあいは、男性に比べて、安定職の経験率が低いことが予想される。ただし、最長職は、期間の限定がないといっても、10年以上継続することが多いので、あえて安定職と区別する必要はないように思われる。しかし、安定職には、さらに「初めて」10年以上継続した仕事という限定があるが、最長職にはそれがない。つまり、安定職は、職業経歴の初期の安定化の達成を知る上で有用な概念といえる。これに対して、最長職は、職業経歴全体からみた安定性を問題にしているといえよう。このような観点から、以下では、まず安定職をとりあげ、つぎに最長職についてみていく。

5.3.1 安定職の有無と開始時機

まず、安定職の経験の有無、すなわち10年以上継続して同じ仕事についた経験があるかどうかをみよう。表は省略するが、男性では、職業経験がある者は全員、安定職の経験があった。女性においても、C-I、IIそれぞれ88.4%、83.9%の者が安定職についている。女性が男性よりも少ないが、あらかじめ予想されたよりも高かった。

では、安定職を開始した年齢はどうか。表5-6からもわかるように、男性では、C-Iは中央値で28.3

表5-6 安定職開始年齢

	N	Q1	Med.	Q3	QR
男 C-I	48	15.0	28.3	31.7	16.7
C-II	66	19.8	23.2	27.6	7.8
女 C-I	46	17.8	22.5	31.3	13.5
C-II	47	20.2	23.6	34.8	14.6

歳、C-IIは23.2歳で、C-Iの方がC-IIより遅い。女性ではC-Iは22.5歳、C-IIは23.6歳で安定職についており、コーホート間の差は、男性に比べて小さい。

さらに、安定職が何回目についた仕事をみたと、C-Iの男性は、1回目と4回目がそれぞれ24.5%を占めていた。ほかの3つのグループ（C-II男性と女性）は、2回目ないし3回目が多数を占めていた。ここでもやはり、さきの安定職開始年齢と同様に、C-I男性の特異性が見出された。

では、上記のようなC-Iの男性とほかのグループとの違いは、何によるものであろうか。また、安定職の開始の時機を決める要因は何であろうか。男性におけるコーホート間の違いは、安定職を開始した歴史的年代との関連が予想される。また、女性のばあいは、結婚や出産といった生殖家族経歴上の出来事の時機との関連が予想される。

このことを知るためには、男性については、安定職を開始した年次をみておく必要がある。表5-7

をみると、C-Iの男性のほぼ半数は、戦後に安定職を開始したことがわかる。ほかのグループのばあいは、C-IIは男女とも、少なくとも

表5-7 安定職開始年

	N	Q1	Med.	Q3	QR
男 C-I	48	1932.0	1944.7	1948.5	16.5
C-II	66	1946.1	1948.4	1953.4	7.3
女 C-I	46	1933.8	1937.5	1946.3	12.5
C-II	47	1946.6	1949.3	1960.8	14.2

4分の3の人が戦後に安定職を開始し、C-Iの女性は、反対に、少なくとも4分の3の人が終戦前に安定職を開始している。こうしたことから、C-IとC-IIでは、安定職を開始した年代が、前者はほぼ終戦前、後者は戦後であったという違いが、まずある。すると、あと説明されなければならない要素は、C-Iにおける男女差ということになる。このことを知るためには、ほかの変数とクロス集計をしてみる必要がある。われわれの分析作業は、現段階ではまだそこまで到達していないが、予想されることとして、このコーホートの男性のばあいは、兵役による経歴の中断が考えられよう。すでにプロフィールでみたように、このグループの兵役経験率は7割近くであった。一方、女性のばあいは、結婚や出産の時機との関係を見る必要がある。すでにみた、初婚年齢の分布と照らし合わせると、女性は結婚後2、3年たって安定職についていることがう

かがえる。いずれにしても、こうしたことを明らかにするのは、今後の課題に属する。

5.3.2 安定職の内容

初めての安定職の内容についてもみておこう。それぞれのグループで多いカテゴリーをあげると、男性ではC-Iの49.0%が農業、続いて28.2%がブルーカラー、12.3%がホワイトカラーについている。C-IIでは42.4%がブルーカラー、続いて19.7%がホワイトカラーについている。女性では、C-Iの65.2%が農業、続いて自営2が17.4%となっており、C-IIでは農業が47.8%、自営2が26.1%となっている(表5-8)。

表5-8 安定職の内容

		ホワイト ト1	ホワイト ト2	ブルー	自営2	農業	その他	N (100%)
男	C-I	8.2	4.1	20.4	10.2	49.0	8.2	49
	C-II	12.1	7.6	42.4	7.6	25.8	4.5	66
女	C-I	-	4.3	10.9	17.4	65.2	2.2	46
	C-II	6.5	2.2	10.9	26.1	47.8	6.5	46

5.3.3 最長職の開始時機

こんどは、最長職について、その開始時機と内容をみておこう。表5-9をみると、全体的にみて、さきの安定職開始年齢よりも、最長職のそれは若干遅い。子細にみると、この傾向は、とくにC-Iの男性に顕著である。最長職が何回目の仕事であるかについてもみておくと、男性ではC-Iで3回目というのが、最も多く、26.5%を占めた。C-IIでは2回目が多く、33.3%になっている。女性においては、C-Iは2回目に多くみられ、C-IIでは、3回目に多くみられる。これもさきの安定職のばあいと比較すると、C-I男性における両者の違いが目につく。

表5-9 最長職開始年齢

		N	Q1	Med.	Q3	QR
男	C-I	49	28.6	31.4	41.4	12.8
	C-II	66	21.6	27.7	35.7	14.1
女	C-I	51	19.2	27.8	34.6	15.4
	C-II	56	19.8	24.0	36.5	16.7

ここでも、やはり最長職を開始した年代をみておく必要がある。表5-10によれば、C-I男性の、少なくとも4分の3が、戦後になって最長職を開始している。これは、さきの安定職のばあいとは異なっている。そして、これら2つの変

表5-10 最長職開始年

	N	Q1	Med.	Q3	QR
男 C-I	49	1945.3	1947.2	1956.9	11.6
C-II	66	1946.9	1953.3	1961.3	14.4
女 C-I	51	1935.1	1944.7	1951.6	16.5
C-II	56	1946.3	1949.5	1962.5	16.2

数の関係を述べるならば、終戦前までに10年以上継続して1つの仕事について、終戦・および戦後の混乱のために、仕事の変更を余儀なくされ、最長職の開始が戦後になったという人が、少なからずC-I男性にはいるということになる。また、4つのグループのいずれも、最長職の開始は、ほとんどの人が戦後であった。

5.3.4 最長職の内容

最長職の内容では、表5-11に示したように、C-Iでは男女とも農業が最も高い割合を示している。次にブルーカラーが多くみられた。C-IIでは、男女とも、ブルーカラーに多くついている。この傾向は、安定職と大きな違いはなかった。

表5-11 最長職の内容

	ホワイト ト1	ホワイト ト2	ブルー	自営2	農業	その他	不明	N (100%)
男 C-I	5.6	8.3	16.7	8.3	52.8	5.6	2.8	36
C-II	18.8	3.1	46.9	18.8	6.3	6.3	-	32
女 C-I	-	6.3	16.7	10.4	58.3	-	8.3	48
C-II	5.0	17.5	35.0	12.5	30.0	2.5	7.5	40

5.4 管理的役割への移行

管理的な役割につくということは、仕事の移動とまた別の意味での、職業経歴における変化であろう。本節では、これについて、コーホート間、男女間で比較をするが、管理的な役割といっても、被雇用職業における管理職（課長以上）への昇進と、自営業における独立開業や業主への就任とでは、その意味も

異なると思われるので、ここでは別個にあつかう。

5.4.1 被雇用職業における管理職への昇進

ここでは、あらかじめ対象を被雇用職業を経験した人に限定するが、まず、この被雇用職業の経験の有無をみておくと、男性ではC-I、IIともに約80%、女性ではC-Iで50%、C-IIで70%に、被雇用職業についての経験があった。

さて、この人びとのうち、管理職への昇進経験者は、男性では、全体の10～15%ほど、女性にはほとんど皆無であった。総じて、管理職経験者は少ないといえる。男性について、初めての昇進の年齢をみると、30歳代が一番多く、次に40～50歳代と続いていた。

5.4.2 自営業における独立・開業および業主の継承

自営業における、独立開業および自営業主の継承をみよう。ここで、自営業種の継承とは、家族従業員から業主への移行のことであり、多くは、親から自営業を継承することがこれに該当するだろう。まず、自営業の経験の有無をみておくと、男性は9割近く、女性でも7割前後の人に自営業に従事した経験があった。ここでは、農業も含まれているので、われわれの対象者のばあい、このように高率なのは、ある程度当然であろう。

さて、自営業経験者のうちで、独立・開業経験者の比率をみると、男性はC-I、IIともに60～70%、女性ではC-Iで約25%、C-IIで約40%であった。初めての

表5-12 独立・開業年齢

	N	Q1	Med.	Q3	QR
男 C-I	19	28.4	31.3	34.1	5.7
C-II	35	23.9	33.0	46.8	22.9
女 C-I	11	30.3	33.0	46.8	16.5
C-II	16	22.0	27.5	36.5	14.5

表5-13 独立・開業年次

	N	Q1	Med.	Q3	QR
男 C-I	19	1945.2	1946.7	1950.1	4.9
C-II	35	1949.3	1957.0	1967.1	17.8
女 C-I	11	1945.9	1948.3	1963.8	17.9
C-II	16	1948.5	1952.5	1964.5	16.0

の独立・開業の経験年齢は、C-Iは30歳前後で経験し、C-IIでは20代前半から30代前半にかけてが多い。そして、C-IIでは男性よりも女性の方が経験年齢が低い(表5-12)。歴史的年代では、戦後すぐに独立・開業している人が多い。C-Iでは1948(昭和23)年までに半数の人が経験し、C-IIはC-Iから5～6年遅れてか

らの、1950年代にかけて経験している人が多い(表5-13)。

つぎに、業主の継承であるが、経験率では、一番多いのが女性C-Iの26.1%が一番多く、一番少ないのは女性C-IIの7.9%であった。男性は12~18%の人が経験している。C-Iの女性の経験率がほかよりも高いのは、配偶者が死亡したために、農業を引き継いだケースが多く含まれているためと思われるが、今回はそのようなクロス集計はまだ行っていない。その業主への移行経験した時機については、該当者が少ないので表は省略したが、年齢では、C-Iでは30歳前後、C-IIは20歳代から30歳代にかけてが多く、年次では、1945(昭和20)年前後に集中していた。

以上のように、独立・開業と業主の継承は、20歳代から30歳代にかけて経験されており、年代では1945(昭和20)年前後が多かった。戦死した父親や夫などの家族の後を継いだり、戦後、新たに独立・開業した人が多かったためと思われる。ここでもやはり、戦争が、こうした出来事に影響をあたえたといえるだろう。

5.5 職業からの引退

5.5.1 引退経験の有無と時機

最後に、職業経歴からの引退についてみておこう。まず、引退経験率をみると、男性では、C-Iの73.5%、C-IIの51.5%が、女性では、C-Iの83.7%、C-IIの66.1%が、現在

すでに職業から引退している。引退の年齢は、表5-14に示したように、C-IIの男性は、現在職業についている人が半数近くいるので、まだ

表5-14 職業からの引退年齢

	N	Q1	Med.	Q3	QR
男 C-I	49	64.3	70.4	-	-
C-II	66	61.3	-	-	-
女 C-I	49	56.6	65.1	72.4	15.8
C-II	56	48.5	60.5	-	-

中央値は算出できないが、現在の年齢からみて、中央値は将来、C-Iと同じくらいか、またはそれよりも高くなるであろう。このように仮定した上で、男女間、コーホート間で若干の比較を試みるならば、まず男女間では、女性よりも男性のほうが、引退年齢が遅いことは確実にいえる。コーホート間では、男性のばあい、上でも述べたように、C-IIがC-Iよりも遅くなる可能性があるが、

女性では、C-IがC-IIよりも遅かった。女性におけるコーホート差は、おそらく仕事の内容と関連しているだろう。すなわち、すでに最長職についてみたように、C-Iは農業が半数を占め、被雇用職が少なかったのに対し、C-IIは反対に、被雇用職が半数を占め、農業が少なかった。被雇用職に比べて、農業のほうが長く続けられる仕事であることは、容易に想像ができよう。このことには、あとでふれたい。

ところで、被雇用者のばあい、最終的な引退に先立って、定年退職を経験することが一般的であろう。われわれの対象者ではどうであろうか。職業経験がある人のうち、定年退職の経験者の割合は、C-I男性が8名(16.3%)、C-II男性が22名(33.3%)、C-I女性が2名(3.8%)、C-II女性が5名(8.9%)と、全体的に少なかった。これもおそらく、上で最長職についてみたように、被雇用職が少ないことと関連していよう。定年退職の経験年齢(中央値)を、男性のみについてふれておくと、C-Iが61.5歳、C-IIが60.1歳であった。

5.5.2 最終職の内容

現在職業から引退にしている人について、最終職、すなわち、最後についていた仕事の内容をみよう。男性では、C-Iの60%近くが農業および自営業であるのに対し、C-IIは70%以上が被雇用職であった。女性のばあいも、C-Iで

表5-15 最終職の内容

		ホワイト ト1	ホワイト ト2	ブルー	自営2	農業	その他	不明	N (100%)
男	C-I	11.1	8.3	16.7	11.1	47.2	5.6	-	36
	C-II	18.8	6.3	46.9	15.6	9.4	3.1	-	32
女	C-I	-	10.4	16.7	8.3	56.3	-	8.3	48
	C-II	5.0	10.0	35.0	15.0	27.5	-	7.5	40

表5-16 現職の内容(再掲)

		ホワイト ト1	ホワイト ト2	ブルー	自営1	自営2	農業	その他	N (100%)
男	C-I	-	-	7.7	-	23.1	61.5	7.7	13
	C-II	5.9	-	17.6	2.9	5.9	64.7	2.9	34
女	C-I	-	-	-	-	62.5	37.5	-	8
	C-II	5.3	5.3	5.3	-	21.1	52.6	2.0	19

は、農業および自営業が6割強を占めているが、C-IIでは被雇用職と自営業がほぼ半々であった(表5-15)。

本報告書の執筆段階では、まだ仕事の内容からみた職業移動の分析を行っていないが、今みた最終職の内容を最長職や現職のそれと比較すると、引退期の様子が、おぼろげながらではあるがとらえられる。まず最長職と比較すると、男女とも、また、どちらのコーホートも、最終職と最長職の傾向にさほど違いがみられない。ここから、多くの人が最長職を引退するまで継続したと思われる。一方、現職の内容は、すでにみたように、大多数が農業および自営業である。つまり、農業および自営業従事者は、被雇用職業の従事者に比べて、現在まで職業を継続している傾向が強いということになる。あるいは、被雇用職業を辞めた後、農業にかかわった人も含まれていよう。そして、このことは、さきに引退の時機との関連で述べた予想と矛盾しないだろう。

5.6 おわりに

以上、職業経歴についてみてきたが、ここで明らかになったことをまとめておきたい。

その前に、本章では、失業・倒産・解雇などの、非標準的な出来事は、経験者が少なく、コーホート間の比較にたえなかったためにとりあげなかったため、これについてふれておこう。失業(仕事につく意志はあるが仕事がない状態)の経験者は、男性のみで、13人であった。失業を経験した年齢や年代に、目立った特徴はみられなかった。勤め先や自営業の倒産、解雇の経験者は、ほとんど皆無であった。

さて、まず職業経歴の男女差についてであるが、顕著な差があったのは、生涯を通じた職業のもちかたである。いうまでもなく、男性は、成人期の大部分にわたって職業をもつことが標準的である。これに対して、女性は、年齢別の就業率が、ゆるやかなM字型曲線を描き、結婚・出産の時期に経歴を中断するパターンが一定程度存在する。とはいえ、ライフコースのどの時期においても、女性の7割以上がつねに仕事をもっている。その意味で、仕事をもつことは、女性にとっても標準的なことといってよいだろう。これは、対象者のほとんどが農家の出身であることを考えれば、当然かもしれない。女性の職業経歴中盤での就業率の低下が、家族経歴の出来事と関連していることは容易に想像がつ

くが、そのことをデータの上で確認することが今後の課題といえよう。

このような職業経歴の男女差は、しかしながら、次に述べるコーホート差に比べると、小さなものであった。しかも、コーホート間の違いは、女性よりも男性において顕著であった。とくに、職業経歴が安定する年齢において、C-IはC-IIに比べて、きわめて遅かった。そこには、戦争という歴史的状況が関連しているように見受けられた。2つのコーホートは、結果的には、同じ歴史的年代に、すなわち、戦後になって、職業の安定を達成した。

さらに、C-Iの男性が、同じくC-IIと比べて、特異である点は、やはり戦争の時期に職業経歴を中断したり仕事の変更を余儀なくされたりした者が多かったことである。その結果、はからずも、C-Iでは、ライフコースを通じた就業曲線の男女差が小さかった。

男女にかかわりなく、2つのコーホートにみられた違いとしてあげておきたいのは、職業の内容についてである。被雇用職業の経験者は、C-IIがC-Iに比べて多かった。これは、おそらく、戦後の産業構造の変化と、そして米軍基地の存在と関連があろう。2つのコーホートは、どちらも、農村出身者が大多数を占めるが、C-Iは、戦後の新しい労働市場に参入するには、年齢的に遅すぎたのだろう。一方、C-IIは、まだ職業経歴を開始して間もないときであり、米軍基地で労働や、基地に関連する産業などの被雇用職業についた者が多かったと思われる。

(赤嶺由紀子、穴田勝美、照屋和彦、野原あやの)

6 居住経歴と自宅の取得

人はある地域において生活を展開している。そして人生において何らかの理由で生活の場を変える人や、一生同じ場所で生活する人もいる。ここでは、ライフコースの一部である居住経歴を、いつ、どのような理由で地域移動を経験していくのかという観点から考察していきたい。なお、ここで対象としている移動は地域的な居住地の移動であり、同一字（集落）内における移動は含まれていない。また、ライフコース上での一つの達成目標であると考えられる自宅の取得についても、その経験率や時機について考察していきたい。

6.1 移動経験

対象者の移動経験率、平均移動回数、移動開始年齢の中央値については表6-1を用いる。居住経歴における移動経験率は、全体的に高い比率をしめしている。男性の方が女性よりも経験率は高く、男性では9割をこえているのに対し、女性のばあいは8割台となっている。特にC-I男性の経験率は98.0%と高い比率を示している。

平均移動回数では、C-IIは男女間において差異はみられないが、C-Iでは男性の方が女性より多くなっている。C-II女性は、移動経験率は一番低い平均回数ではC-I女性より若干ではあるが多くなっている。また、移動開始年齢の中央値でもC-IIでは男女間で差異がみられないが、C-Iは2歳ほど男性の方が早くなっている。移動開始の年齢は、C-IよりもC-IIの方が若くなっている。

表6-1 住居移動について

		N (100%)	移動経験 率 (%)	総移動 回数	平均回数 1	平均回数 2	開始年齢 中央値
男	C-I	49	98.0	210	4.4	4.3	18.9
	C-II	66	93.9	221	3.6	3.3	16.9
女	C-I	56	85.7	157	3.3	2.9	21.1
	C-II	59	83.1	192	3.9	3.3	16.7

注：平均回数1＝総移動回数÷居住移動経験者数

注：平均回数2＝総移動回数÷コーホート全員

6.2 移動時機

図6-1で年齢別地域移動率をみると、C-Iでは、男性が20歳代後半に、女性が20歳代後半から30歳代前半に、C-IIでは、男性が10歳代後半に、女性が10歳代後半から20歳代前半に、それぞれピークがみられる。二つのコーホートにおいて10歳近い開きがあり、歴史年代では同時期に移動が集中していると予想される。また、そのピークは男性の方が女性に比べてより鋭く、経験率も男性の方が高くなっている。

このことをふまえた上で、図6-2で年次別の地域移動経験率をみると、1945(昭和20)年、すなわち終戦およびその直後にを中心にその前後で地域移動が集中しており、その経験率は、女性よりも男性の方が高くなっている。また、男性C-Iにおいては、1935(昭和10)年から1940(昭和15)年代前半にかけても地域移動が集中しており、兵役や海外への出稼ぎによる移動が理由であると思われる。このように、戦争による「兵役・復員」「疎開・引揚」等の歴史的要因が、対象者の地域移動に大きな影響を及ぼしているといえるだろう。

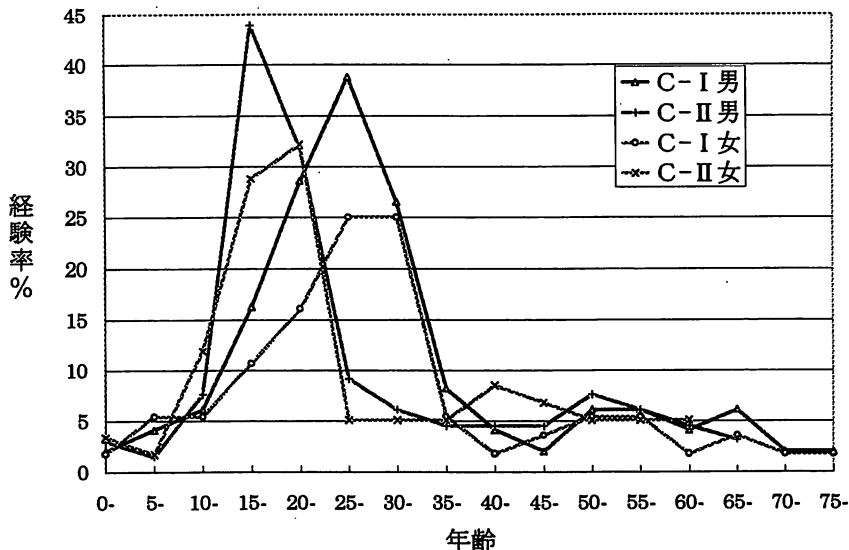


図6-1 年齢別地域移動経験

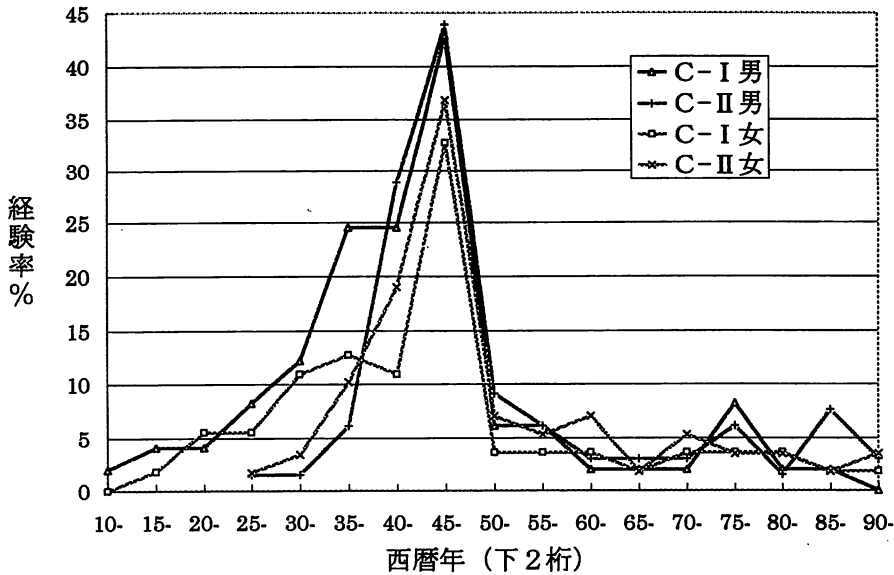


図6-2 年次別地域移動経験

6.3 移動の理由

つぎに表6-2の移動における理由別分布をみていきたい。これは延べ数による移動理由の集計である。移動理由は男女間において違いがみられる。男性のばあいは、「兵役・復員」が一番多く、つづいて「職業上の理由」「住宅事情」となっている。女性のばあいは、「疎開・引揚」「住宅事情」が多く、つづいて「初婚」「職業上の理由」となっている。男女ともに、「兵役・復員」または「疎開・引揚」という戦争関連による移動が上位をしめ、特に男性C-Iのばあいは、二つの理由だけで4割強をしめている。これらが、1945（昭和20）年前後に移動経験が集中しており、男性の経験率がより高くなっている原因であるといえるだろう。また、「住宅事情」「職業上の理由」は、男女共通して上位をしめている。

表6-2 移動における理由別分布

		進学	初婚	初就職	職業上の理由	親の事情	配偶者の事情	子どもの事情
男	C-I	1.4	0.5	7.6	25.7	3.3	-	-
	C-II	3.2	-	10.4	14.9	2.7	0.5	0.5
女	C-I	0.6	12.7	7.6	8.9	6.4	6.4	1.9
	C-II	1.0	10.4	7.8	13.5	10.4	6.8	2.1

(続き)

		兵役・復員	疎開・引揚	住宅事情	婚姻上の理由	その他	N (100%)
男	C-I	37.6	7.6	9.5	0.5	6.2	210
	C-II	23.5	12.7	18.1	-	13.6	221
女	C-I	-	27.4	13.4	3.2	11.5	157
	C-II	-	14.1	20.3	1.6	11.5	192

6.4 自宅の取得

自宅取得(新築又は購入)の経験率は、C-I男性は95.9%、C-II男性は95.5%、C-I女性は83.9%、C-II女性では93.2%となっており高い経験率を示している。ここで表6-3の自宅取得年齢をみていくと、C-IよりもC-IIにおける中央値が低く、C-IIの方が10歳前後早い時期に自宅の取得を経験している。特に男性C-Iにおける中央値は57.8歳とかなり高く、その反面、四分位範囲(QR)は14.7と一番小さくなっている。ということは、どちらのコーホートも同じような年次に自宅を取得したことになる。そこで、表6-4の自宅取得年をみると自宅

の取得は1973(昭和48)年の沖縄の本土復帰前後に集中している。それではなぜC-Iにおいて取得年が遅いのだろうか。C-Iにおける自宅の取得が遅い理由として次のことが考えられる。まず、戦争により仕事が安定する時機が遅れたというコー

表6-3 自宅取得年齢

		N	Q1	Med.	Q3	QR
男	C-I	48	49.8	57.8	64.5	14.7
	C-II	66	35.3	46.5	54.0	18.7
女	C-I	55	43.3	54.7	64.8	21.5
	C-II	58	37.0	45.5	52.0	15.0

表6-4 自宅取得年

		N	Q1	Med.	Q3	QR
男	C-I	48	1964.3	1973.5	1980.0	15.7
	C-II	66	1960.3	1973.0	1980.0	19.7
女	C-I	55	1958.8	1971.0	1979.3	20.5
	C-II	58	1963.0	1971.5	1979.2	16.2

ホート効果と、ある時期に自宅の新築ラッシュがあったという時代効果が反映されたためではないかと思われるが、詳しい検討は今後の課題である。

6.5 まとめ

ここまで居住経歴・自宅の取得をみてきたが、男女間またはコーホート間においてそれぞれ違いがみられた。地域移動では、男性の方が女性よりも経験率は高くなっていたが、男女差についてはクロス集計をする必要があるだろう。平均回数は、C-Iでは男性の方が多くなっているが、C-IIでは男女差がみられなかった。地域移動では、1945（昭和20）年前後の終戦およびその直後に集中しているのが全コーホート共通した特徴である。移動理由でも戦争関連による移動が、理由のトップをしめ、特に男性の戦争関連による移動はC-Iで4割強、C-IIで3割強となっている。戦争という歴史的要因が個人のライフコースにおいて大きな影響を及ぼしており、唯一地上戦が行われた沖縄の特徴が顕著に表れているといえるだろう。今後の課題としては、移動の時機と理由のクロス集計を行ってみる必要があるだろう。

自宅の取得は、どのコーホートにとっても極めて標準的な出来事になっている。取得年の中央値は、沖縄の本土復帰前後に集中しており、コーホート効果や時代効果が反映されていると思われる。

（比屋根准子）

7 おわりに

本報告書では、大正初期、および大正末期から昭和初期という、2つの出生コーホートに属する人びとの人生を、重要な出来事の経験の時間的な軌跡を再構成するという方法を用いて考察してきた。前の章までは、そうしたライフコースを構成するいくつかの経歴（社会的役割または生活領域の軌跡）に分けて観察してきた。そのなかで繰り返し強調されたことは、調査対象者のライフコースには、かれらが生きてきた時代の影響の痕跡が大きく認められたことであった。とくに、沖縄戦を含む戦争の影響は絶大であり、これが2つの出生コーホートに属する沖縄の人びとのライフコースの展開を特異なものにしているといえる。そこで、最後に、経歴別に述べられてきたライフコースへの時代の影響を、とくに戦争にウエイトをおきながら一括して提示することで、本報告書のまとめに代えたい。ほんらいならば、戦争のみならず、歴史的な背景を広範に視野に入れつつ、対象者のライフコースの全体像を総括すべきところであるが、本報告書はまだ中間報告の段階でもあり、データ分析も充分に行っていないので、この作業は今後の課題としておきたい。なお、最初にも述べたように、本調査研究における2つの出生コーホートは、早稲田大学による東京・福島調査の対象者の一部と同じ出生年に設定したので、対象者が歩んだ時代背景との関連については、すでに紹介した同大学による調査報告書を参照されたい。

さて、まず対象者が生きてきた時代背景全体を見渡しておく意味で、これまでにあつかってきた出来事の平均的な経験時機（年齢の中央値）から代表的パターンをコーホート別・男女別に構成し、それを歴史年表のなかに位置づけておこう。図7-1および図7-2中、網かけがほどこされた斜めの帯は、調査対象者のライフコースが、年齢を重ねつつ歴史時間のなかを通過してきたようすを、男女別・コーホート別に表している。それぞれの帯の上に記された横線は、本報告書でとりあげたライフコース上の出来事の経験年齢の中央値の位置を表している。年齢の尺度は図の右端の縦軸に示されている。また、この横線の位置から下に垂線をおろせば、その出来事が経験されたおおよその歴史的年代がわかるようになっている。各出来事の経験年齢の実際値は、表7-1に掲げた。まず、これらの図表をみながら、男女・各コーホートのライフコースの平均像を描いてみよう。

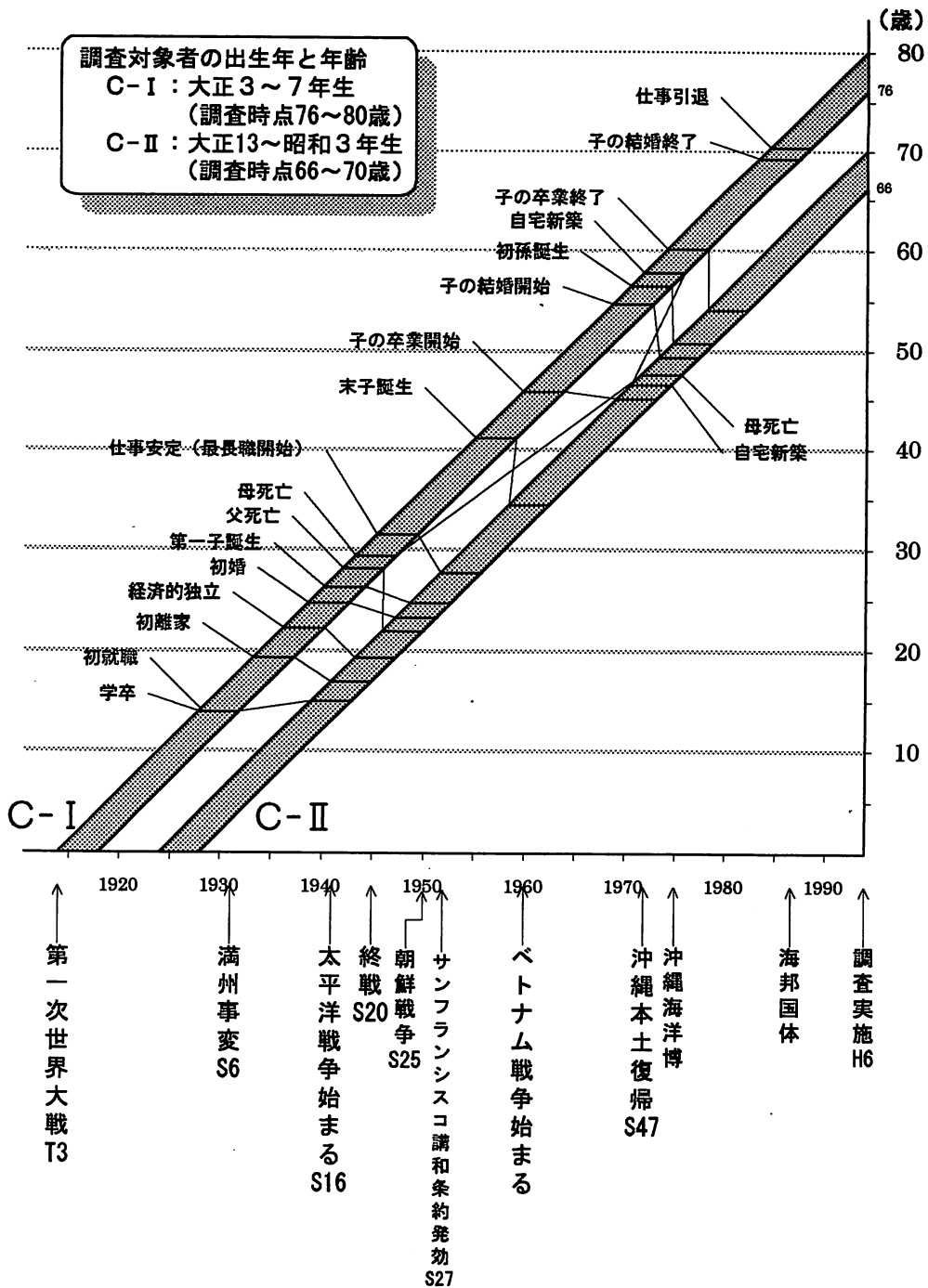


図7-1 男性のライフコース

大正3～7年に生まれたC-Iは、ほとんどの人が義務教育を終えて、元号が昭和に変わったところに職業経歴を開始したが、その大多数は実家での農業に従事した。そのため、初離家は、男性のばあいは兵役、女性は結婚をむかえる20歳前後で経験された。それ以外にも、軍需産業の興隆とともに、本土（多くは関西）に働きに行った人もいた。そして、男性も女性も、日中戦争が起こり、第二次世界大戦の勃発の危機がせまるなかで、結婚し、子づくりを始めた。男性は、たび重なる召集の合間に妻をめとり、また女性は、乳飲み児を抱きかかえながら、夫の出征を見送ったのである。そして、それが夫との最後の別れとなった女性も少なくなかった。一方、男性は、親きょうだいや、妻子を残して、出征しなければならなかった。われわれの男性対象者は、そのなかでも運よく生きて帰ってきた人びとなのであり、大半は異国の地で死んだのである。しかし、どうにか帰っては来たものの、故郷は戦場と化し、一家全員が沖縄戦で亡くなっていたという人もいた。これに対して、夫が出征していた女性のほうは、幼い子どもを連れて、砲弾の飛び交うなかを逃げ回り、そのなかで、一緒に逃げていた舅や姑を亡くした人もいたのである。ところで、C-Iの男性のなかには、いわゆる15年戦争のあいだ、戦地を転々としていたため、戦後に復員した後に結婚した人もいた。かれらは、同じコーホート仲間よりも遅く、自分の家族（生殖家族）をもったのである。

このコーホートは、職業経歴の面で遅れを経験していた。さきに述べたように、職業生活は昭和の初めにすでに始まっていたにもかかわらず、仕事の安定（最長職の開始）は戦後にまでもちこされたのであった。このことは、とりわけ男性に顕著であった。もともと、かれらの仕事の内容は、大半が農業であったので、1つの仕事に落ち着くかどうかといったことをとりたてて問題にすることもないかもしれない。それよりも、後述するC-IIとの比較で、特徴的なことは、このコーホートの多くは、戦後の米軍占領下における、第2次および第3次産業の労働市場に参入し、そこで継続的に働くには、年齢が高すぎたことである。そのため、C-IIに比べると、農業にとどまる人が多かった。

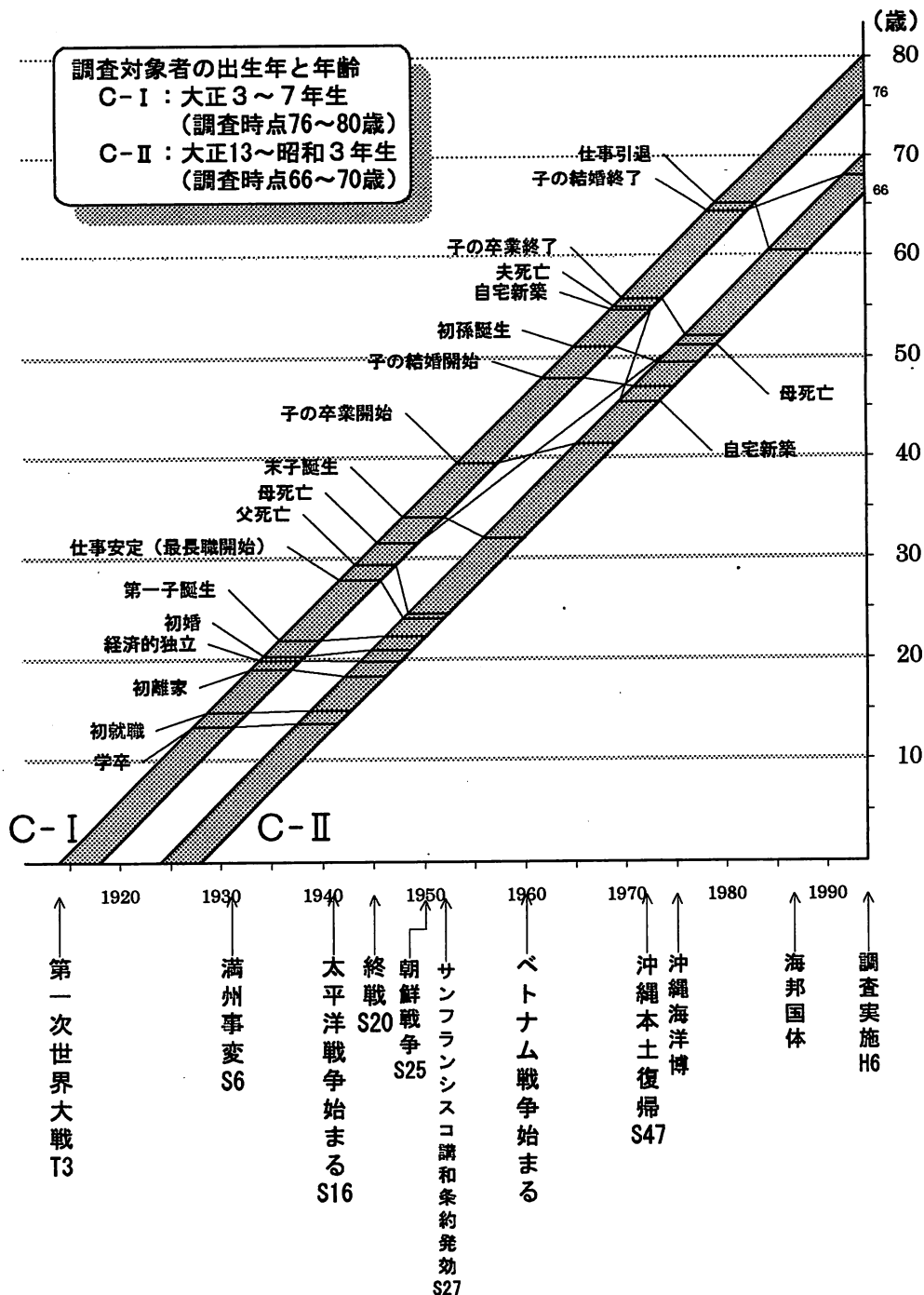


図7-2 女性のライフコース

C-Iの人びとにとって、戦後になって家族生活をやり直したというのがふさわしいだろう。子どもはすでに戦前から生まれていたが、戦後かなりたってまで、とくに男性は1960年頃まで子どもをつくりつづけた。そして、子どもが成人して、結婚し、初孫が生まれたのは、1972（昭和47）年の沖縄の本土復帰のころであった。自宅の新築もこのころ行った人も多かった。

C-Iよりも10年若い、大正13～昭和3年生まれのカ-IIが義務教育を終えたのは、第二次世界大戦が始まった前後である。このコーホートのなかでも出生年が若く、また小学校の高等科まで行った人のばあいは、卒業時にすでに太平洋戦争に入っていた。したがって、このコーホートの人びとは、学校卒業から初就職、初離家、経済的独立、初婚といった、成人期への移行をかたちづくる出来事を、戦争のまただ中で経験した。多くの人は、小学校を終えて働き始めたが、その仕事の内容は、C-Iとは異なり、農業よりも工場労働が多かった。なかには、本土の軍需工場に就職した人もいた。このため、初離家の経験年齢は、C-Iよりも若かった。もっとも、農業が少ないのは、このコーホートには、義務教育を終えてさらに進学した人の数が、C-Iよりも多いことにもよる。ともかく、やがて太平洋戦争末期になると、男性の多くは、兵役について。C-II男性のうちの6割に兵役経験があり、その任地はほとんどが国内であり、おそらくそのうちの大多数は沖縄戦への動員であった。ところで、われわれの対象者のなかでは少数ではあるけれども、このコーホートで中等教育レベル以上の学校に進学した人の戦争体験についてふれないわけにはいかない。かれらは、米軍の沖縄上陸前までは、飛行場建設や壕掘りなどに動員され、沖縄戦では、「鉄血勤皇隊」や「ひめゆり学徒隊」などとして、正規軍とともに戦闘に参加し、その多くが死んでいったのである。われわれの対象者のなかにもこれらの経験者がいたが、かれらは、その数少ない生き残りといっておくべきだろう。

このように、戦争のなかで大人の仲間入りをしたC-IIは、戦後になって、結婚し、自分の家族をもった。職業経歴では、男女にかかわらず、多くの人が米軍占領下での、基地関係の労働や、沖縄の復興事業に従事した。このため、大半が農家出身者ではあったが、農業に従事した人は少なかった。ただ、男性に比べると、女性は、婚家での農業に落ち着いた人が多かった。ともかく、そうした被雇用職で得た現金所得で潤ったおかげか、このコーホートは、自宅の新築を、C-Iと同じ年代、すなわち本土復帰のころに経験した。つまり、経験

年齢からいえば、10歳ほど若くして、自分の家を建てた（あるいは、建てなおした）ことになる。

C-Iに比べて、このコーホートは、子どもの数が少ない。結果的に、末子の誕生年がC-Iとほぼ同じとなっている。この傾向は女性よりも男性に顕著である。ところが、子どもの学歴は、C-Iに比べて高い。その結果、子どもの学業終了は、C-Iよりも遅い年代で始まり（本土復帰のころ）、比較的短期間で終わった。一方、子どもの結婚は、C-Iよりも若い年齢で始まり、初孫の誕生も、50歳までに半数の人が経験していた。しかし、現時点では、すべての子どもが結婚した人は、まだ半数に満たない。子どもの産み終わりの年齢が前のコーホートよりも若いことを考慮に入れると、そこには子どもたち自身の晩婚化あるいは非婚化がうかがわれる。

表7-1 出来事経験年齢の中央値

生活（役割）領域				男性		女性	
定住家族	生殖家族	教育・職業	その他	C-I	C-II	C-I	C-II
		学卒		13.9	15.0	13.3	13.6
		初就職		14.1	15.2	14.7	14.9
初離家				19.3	16.9	19.0	18.3
経済的独立				22.3	19.3	19.9	19.8
	初婚			24.7	23.3	20.3	20.9
	第一子誕生			26.3	24.7	21.9	22.3
父死亡				28.1	22.0	29.3	24.5
		安定職開始		28.3	23.2	22.5	23.6
母死亡				29.3	47.5	31.5	51.2
		最長職開始		31.4	27.7	27.8	24.0
	末子誕生			41.1	34.4	34.0	32.0
	子の卒業開始			45.8	45.1	39.4	41.3
	子の結婚開始			54.7	49.3	47.9	47.0
	初孫誕生			56.5	50.7	51.0	49.4
		自宅取得		57.8	46.5	54.7	45.5
	子の卒業終了			60.1	54.1	55.8	52.1
	子の結婚終了			69.3		64.3	68.0
		職業引退		70.4		65.1	60.5
	配偶者死亡					55.0	

以上、われわれの対象者のライフコースの平均的な特徴を、かれらが生きてきた時代背景と照らし合わせながら述べてきたが、そうした時代背景のなかでも、とりわけ戦争がいかにかれらのライフコースを特異なものにしたかをうか

がい知ることができた。そこで、最後に、そうした戦争の影響のなかでも、とくに、家族との死別体験についてふれておきたい。というのも、家族員との死別という、家族経歴上の出来事に、戦争の痕跡がもっとも如実に認められたからである。

表7-2は、戦争による家族員との死別経験を、死別した相手別に、その経験内容をまとめたものである。まず、親については、なんらかのかたちで親を沖縄戦で亡くした人が多かったが、その経験内容は、コーホートによっていくぶん異なっていた。C-Iは、父親は大半が沖縄戦以前に亡くなっていたが、沖縄戦のときまでに生存していた父親の多くを、このときに亡くした。一方、母親は

表7-2 戦争による家族との死別経験

死別者	経験の内容
父親	C-I：父親の半数は、戦争が激しくなる前に死亡していたが、残りの多くは、沖縄戦に巻き込まれて死亡。このため、父親死亡の経験年齢のばらつきは小さい。 C-II：少なくとも4分の1が、沖縄戦で父親を亡くす（10歳代後半）。
母親	C-I：半数は、終戦までに母親を亡くしているが、そのうちの半数は、沖縄戦で亡くなったと思われる。経験年齢が集中。 C-II：経験時機が早いほうから4分の1は戦争で亡くなったが、大半は戦後まで生き延びた。しかし、戦争で母親を亡くした人の経験年齢は、父親の場合と同様、若かった。
祖父母	C-Iの祖父の大半は戦争が激しくなる前に死亡していたが、このコーホートの祖母、およびC-IIの祖父母の多くは、戦争末期あるいは終戦直後に亡くなった。結果的に、祖父母を亡くした年齢は、C-IIがC-Iよりも若かった。
きょうだい	どちらのコーホートも、少なくとも4分の1以上は、戦争できょうだいを亡くす。コーホート間の違いとしては、C-Iよりも10歳若いC-IIは、それだけ初めてきょうだいを亡くした年齢が若かった
配偶者	C-I女性の4人に1人は、戦争が原因で夫と死別
子ども	C-Iの少なくとも半数は、沖縄戦から終戦直後にかけて子どもを亡くした。

大半が沖縄戦のときまで生存しており、このときに母親を亡くした人が多かった。このように、父母の寿命の違いが、沖縄戦とあいまって、親の死亡の経験時機に違いをもたらしていた。C-IIは、両親とも大半が戦後まで生存したが、しかし、沖縄戦で親を亡くした人は、本人がまだ10歳代後半と、C-Iに比べて年齢が若かった。その意味で、親を亡くしたことの痛手は、よりいっそう大きかったことだろう。そして、どちらのコーホートも、昭和20年に、両親を同時になくした人が1~2割はいた。

祖父母の死亡については、半数以上が、自分の生まれる前に亡くなったか、あるいは、自分が生まれた後に亡くなっている、いつ亡くなったかを知らない。すなわち、認知度が低い。しかし、それ以外のケースでは、戦争で祖父母を亡くした人も少なくなかった。ところで、対象者のなかには、戦前、祖父母にあずけられて、親が海外に出稼ぎに行ったケースが1~2割、とりわけC-IIの男性では4分の1あったが、このなかには、親はそのまま出稼ぎ先で死亡あるいは行方不明になり、事実上の保護者であった祖父母を沖縄戦で亡くした人も、正確な人数はまだ算出していないが、含まれている。その意味でも、戦争による祖父母の死亡は、よりいっそう危機的な出来事であったと思われる。

きょうだいの死亡については、今回の調査では、調査デザイン上の事情で、初めて経験した時機のみに限定せざるをえなかったが、どちらのコーホートも、戦争できょうだいを亡くした人は、その初めての経験だけをみても、少なくとも4分の1以上はいた。そのせいか、男性では、対象者本人があととり予定者ではなかったが、結果的に兄が亡くなったために、自分があとをとったケースが、C-IIよりもC-Iに多かった。

つぎに、配偶者との死別であるが、それを述べる前に、結婚の時機についてふれておくと、今回われわれが調査対象とした出生コーホートの人びとは、戦争によって結婚の時機が大きく狂わされた人は、戦後に結婚したC-I男性の4分の1をのぞいて、それほど多くなかった。C-I男性の半数、同じく女性の4分の3以上は、戦争が始まる前にすでに結婚していた。また、C-IIは戦後になって適齢期を迎えたからである。

ところが、戦争が激しくなる前に結婚したC-Iの人びとは、戦争の激化によって結婚生活がなんらかのかたちで中断あるいは終了させられてしまう。まず、結婚後に夫と1年以上別々に暮らした女性は、このコーホートでは半数にのぼ

った。さらに、このコーホートの女性の4人に1人は、戦争が原因で夫と死別したのである。もちろん、男性のなかにも、妻を沖繩戦で亡くした人もいた。そうして戦争で配偶者を亡くした後、戦後に再婚した人は、女性は男性に比べてはるかに少なかった。

C-Iには、配偶者のみならず、沖繩戦から終戦直後にかけて、子どもを亡くした人も多かった。その比率は、すくなくとも半数は超えていた。

このように、われわれの調査対象者は、親、きょうだい、祖父母、そして結婚していた人は、配偶者、子どもといった、だれかしら近親者を戦争で亡くしたといえる。おそらく、近親者を一人も失わなかったという人は、正確な人数はまだ算出していないが、きわめてまれであったのではないだろうか。

以上、単純集計結果の分析を主体とした本報告書において、対象者のライフコースの展開のしかたに、いくつかのパターンが存在することが示唆されたが、今後はさらに集計分析を進めて、そうしたパターンを析出していくとともに、それらをかたちづくった種々の要因について考察することが、本調査研究に残された当面の課題であるといえよう。また、家族員との死別経験を始めとする戦争の痕跡が、後のライフコースの展開にどのように作用したかが、今後解明されなければならないだろう。

(安藤由美)